

世の中捨てたもんじゃあ……

内藤 真理子

散歩の途中、急な下り坂に差し掛かった。最近造成された住宅地で広々とした道の両側に真新しい家が建ち並び、一画にはマンションまで何棟かありゆったりしている。いつもは人通りもない道なのだが、その日は広い道の真ん中に、歩行補助車につきまわりながら道路に座り込み肩で息をしているお爺さんがいた。

道は綺麗だし、車も通らないのだがその様子が尋常ではない。

「お手伝いをしましょうか？」

連れ合いが声をかけた。

「お願いします」と、虫の息の答えが返って来たのだが、きつと藁にも縋る思いでいたのだろう、お爺さんは全面的に連れの方に向き直り、縋りついてくる。連れは押し倒されそうになっている。

昔は力強かった連れだが、今では我が家では力仕事は私の役割になっている。押される彼を慮って、何とか老人を補助車の椅子に座らせようと、ズボンのウエストを握り持ち上げようとした。私は親の介護の経験もあるしコツは分かっていると、自負していた。だが何としても持ち上がらない。お爺さんが太っているわけではない、私に力がなくなつたのだ。私達夫婦の力の限界がみえた。ショックだった。それでも何とかしなければと必死だった。

すると、私とご老人の間に赤ん坊を抱っこ紐で結わいつけた若い女性が割り込んできた。そしていとも簡単にお爺さんを持ち上げ補助車に座らせてしまった。

気が付けば、周りの家からもパラパラと三人の女性が出てきてそれぞれにご老人の力になろうとしていた。そして一件落着。

さて、補助車に着地したお爺さんをどうしよう、と思っていると、若い男性が慣れた手つきで補助車のブレーキを外して動かした。

「お知り合いの方ですか？ お宅を御存じなのですか？」

私達夫婦は行掛り上、ご老人を気にかかけ矢継ぎ早に聞いた。

「いいえ、前にも同じようなことがあったのでお宅は分かっていますから……」
若者も周りの主婦も、当然の如く老人を介助して事なきを得たのだった。